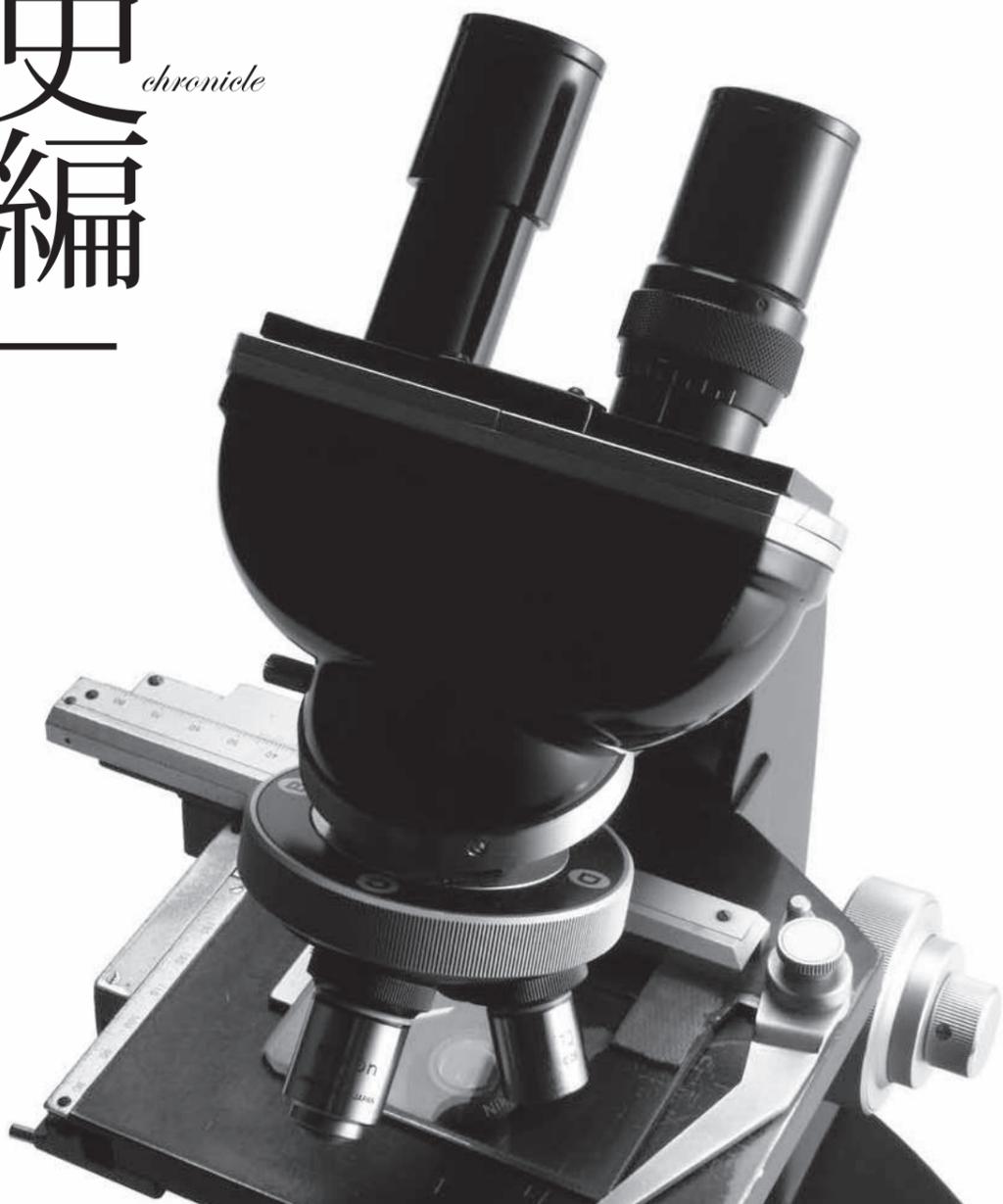


歴史編

40th Anniversary
Iwate Health Service Association
財団法人岩手県予防医学協会創立40周年記念誌

chronicle



財団法人岩手県予防医学協会の40年

1970
▶79

昭和45年—昭和54年

胎動期

県民の健康と福祉を願って



1980
▶89

昭和55年—平成元年

躍進期

新天地で飛躍に向けた再出発



1990
▶99

平成2年—平成11年

発展期

県内唯一の総合健康支援機関として



2000
▶09

平成12年—平成21年

展開期

創立半世紀へ向けた取り組み



前史 予防に勝る治療なし

予防協誕生の経緯

「予防医学の夜明け」

健やかにいきいきと暮らすために病気を予防し、健康を維持する。病気になってしまってから治療することより、病気になるににくい心身を作る。すなわち予防医学というアイデアがわが国に広がり始めたのは、昭和30年代半ばから昭和40年代半ばにかけて続いた高度経済成長時代である。

全国的な動きとしては、昭和30年（1955）に神奈川県予防医学協会が任意団体として設立され、学校検診を中心に進めながら昭和36年（1961）に財団法人の認可を受けた。

また、がんの早期発見や早期治療、生活習慣の改善などが話題となり、短期入院精密身体検査が「人間ドック」と呼ばれマスコミでも注目を集めるようになっていた。

「予防に勝る治療なし」

財団法人岩手県予防医学協会（以下、当協会）の創立者である遠山美知が「予防に勝る治療なし」という言葉に出会い、予防医学に強い関心を持つようになったのもその頃であった。美知は、若い頃から

予防医学的な活動に興味を持ち、遠山病院の初代理事長兼院長である夫とともに結核検診や人間ドック事業にいち早く着手した。と同時に看護婦の養成や国際交流事業など幅広い活動に関わっていた。

人類初の宇宙飛行士となったガガーリン少佐の「地球は青かった」という言葉が話題を集めた昭和36年6月、美知は、日ソ協会主催のソ連訪問団の一員としてソ連（現ロシア）内の医療制度や教育事情を視察した。そのときソ連の医師団から「予防に勝る治療なし」ということを聞き、「まったくその通りだ」と共感した。

ソ連から帰国した美知は、予防医学の重要性を夫と語り合い、遠山病院の健診事業を拡充する一方、院内に検査室を立ち上げて、市内のいくつかの小学校からは検便による寄生虫卵検査を受託して検査事業をスタートさせた。

この検査室に昭和40年（1965）4月、のちに当協会の「真の創始者」と呼ばれる夢多き青年、獣医師の栗原耿が入り、新しい風を吹き込んだ。

「母体としての岩手臨床検査センター」

栗原は、検査室へ入って間もなくアメリカへ留学し、臨床検査や予防医学に対する知識を深めて帰国した。それにあわせるように遠山病院では昭和41年7月、栗原を検査科長兼岩手臨床検査センター所長に抜擢した。栗原は、それまで保健所が行っていた学童の寄生虫卵検査等を受託して業務の拡大を図った。この活動が当協会の源流となった。

栗原は言う。

「協会の発足は、昭和41、42年頃遠山病院の院長夫妻を始め、何人かの医局の先生方が抱いていた予防医学的な考え方に端を発している。それは、遠大にして且つ総合的な構想であったが、協会発足の現実的なきっかけは遠大な構想ではなく、近隣の学校から学童の寄生虫卵検査の依頼が来るようになったという些細なことであった」（栗原耿「岩手県予防医学協会の誕生」、「10年の歩み」所収）と。

昭和43年に何気なく引き受けた盛岡市内某小学校の曉虫卵検査をしたところ柿の種状の卵が眼前にビッシリと広がった。検査の結果、全学年の有卵率は平均して24〜25%に達した。

これが、後々まで語り継がれる「某小学校の高有卵率ショック」で、臨床検査室で一緒に顕微鏡を覗いていた田部国彦は「協会創立の動機、発火点」（誕

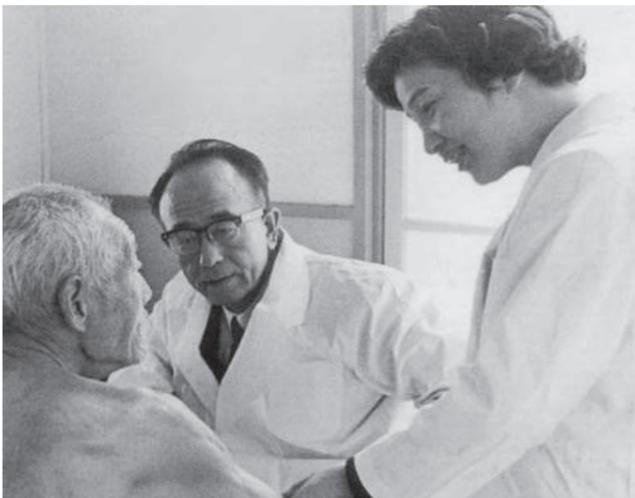
生のころ）、「遠山病院創立50周年記念誌」所収」と語っている。

「協会設立前夜」

その後、市内の学校から便検査や曉虫卵検査の依頼が急増し、臨床検査室には田部を含めて3名の専従スタッフが生まれ、彼らに企画や結果処理事務のための部屋が与えられた。さらに尿や血液関係等の集団検査依頼も増加し、それらの業務は病院の臨床検査業務とはなじまない一種の独立した事業となっていた。そのとき栗原は、寄生虫対策を原点とした公衆衛生活動を独自に展開してゆけば面白いものになると思い、予防医学協会的なものを作ってみようと考えた。

ちょうどその頃、昭和43年6月、遠山富夫院長が病没した。夫の遺志を引き継いだ美知は、新理事長として病院経営に携わる一方、53歳で急逝した夫の悲劇から「予防に勝る治療なし」という信念を深めた。そして主体性を持つようになった栗原たちの活動を見て、予防医学事業の具体的な一歩として寄生虫メソバを中心とする数人の職員を遠山病院から独立させ、逐次、事業内容や設備を充実させることとした。

こうして予防医学協会設立への端緒が開かれたのであった。



遠山富夫・美知夫妻（昭和42年11月）



遠山美知 モスクワ赤の広場にて（昭和36年6月）

1970
79

県民の健康と福祉を願って

「予防医学協会 ● 通史1」



任意団体として協会が発足

当協会の組織作りは、昭和44年から始まった。美知と栗原は全国の動きを見聞し、総合的な予防医学運動の拠点づくりを目指したが、寄生虫予防活動に目的を絞った組織をといて県と折り合いがつかず交渉が難航した。

また、予防医学協会の事業は個人病院レベルの事業ではなく関係諸機関が一致協力して専門機関を設立して総合的に推進すべきもので、将来的な発展のためには県医師会の参加と協力が不可欠と考え折衝したが、理解を得ることができなかった。

これは岩手県に限られたことではなく、全国的にも当時の予防医学協会は医師以外の職業の人が多数参加していた。昭和45年3月に発足した岩手県予防医学協会設立準備委員会（代表・遠山美知）も設立委員とし

て岩持静麻（県農協中央会長）、太田俊穂（岩手放送社長）、渡辺武（岩手日報社長）など美知の知己ともいべき盛岡の有名人が名を連ねた。医療関係では八木義郎（盛岡市医師会長）と千葉俊蔵（岩手県国保連事務局長）が設立委員になったが、医師会としての参加ではなかった。

このように当協会の組織作りはいくつもの壁にぶつかったが、岩手国体が開催された節目の年、昭和45年（1970）10月1日に任意団体の岩手県予防医学協会が誕生し、遠山病院の一角を間借りする形で栗原以下4人の職員が寄生虫卵検査から業務を開始した。

設立当時の役員構成

誕生の頃の活動で注目されるのは、同年11月10日、寄生虫予防の第一人者である大鶴正満先生を講師に招き、教育会館で「寄生虫講演会」を開催したことである。すでに過去の問題であるという認識が強かった寄生虫について実態を知ってもらい、寄生虫卵検査への理解を深めてもらうことを目的としたイベントであった。

そして同年12月18日、県知事の認可を得て財団法人岩手県予防医学協会が正式に発足し、初代理事長に遠山美知、常務理事に佐藤公哉（病院長）、事務局長に内館弘（病院事務長）、検診部長に栗原耿（病院検査課長）が選任された。

顧問、理事、評議員の名簿を見ると県知事をはじめ

設立時の役員 (昭和45年12月18日)

役名	氏名	職名 (当時)
顧問	植松 稔	岩手医科大学公衆衛生学教授
〃	鈴木 善幸	衆議院議員
〃	石田 孝隆	岩手銀行頭取
〃	千田 正知	岩手県知事
理事長	遠山 美知	医療法人遠山病院理事長
常務理事	佐藤 公哉	協会所長、医療法人遠山病院長
〃	内藤 弘	協会事務局長、医療法人遠山病院事務長
〃	栗原 耿	協会業務、検査部長
理事	岩持 静麻	岩手県農協中央会長
〃	岩太 俊穂	岩手放送社長
〃	千八 葉木	岩手県国民健康保険団体連合会事務局長
〃	八渡 俊義	盛岡市医師会長
〃	八渡 武	岩手日報社長
監事	永井 一三	永井法律事務所所長
〃	宮田 実	宮田会計事務所所長
〃	阿部 金次郎	岩手労働基準協会事務局長
〃	岩川 長五郎	岩手県農協役員連盟会長
〃	加賀 普一	岩手県教育委員会保健体育課長
〃	加賀 精一	岩手労働基準局長
〃	金子 彦	岩手県立中央病院長
〃	川名 保治	岩手医科大学細菌学教授
〃	工藤 徹	岩手県市町会長
〃	国分 保寿	岩手県町村会長
〃	佐々木 尚一	医療法人遠山病院集団検診部長
〃	鈴木 尚一	秋田県予防衛生協会事務局長
〃	高橋 富雄	岩手県薬学会長
〃	多田 常治	岩手県対ガン協会事務局長
〃	寺島 五郎	岩手県厚生部医薬課長
〃	中野 了	岩手県厚生部環境衛生課長
〃	中野 先発	岩手県厚生部予防課長
〃	中野 弥	岩手県衛生研究所長
〃	村井 源一	岩手県薬剤師会長
〃	丸山 利憲	宮城県予防医学協会事務局長
〃	南出 英和	岩手県学校保健会長
〃	南紀 夫	岩手県保健所長会長
〃	猪原 光	岩手県結核予防会事務局長



岩手国体ポスター (昭和45年)



遠山病院3階おどり場を仕切って作った検査事務室 (昭和45年)

実に広範且つ多彩な顔ぶれであるが、県医師会の協力が最後まで得られず、「それがその後の協会運営を苦しくすると同時に遠山病院にとっても大変な重荷を背負うことになった」（栗原・前掲書）という。

けれども遠山理事長も栗原部長も「遠大にして且つ総合的な構想」を胸に秘めて、「当協会は、学術、行政両面からの支援、指導を受けて、医療機関、保健所、地域社会事業等における保健衛生業務への全面的な協力と県民の健康と福祉に寄与する」（設立趣意書）という目的に向かって帆を上げた。



旧済生会病院(当時キンダーホーム)2階に移転。建物の右側に「岩手県予防医学協会」の白い看板がかかっている(昭和47年)



寄生虫担当者だけが一足先にキンダーホーム2階に引っ越し(昭和46年)



キンダーホーム2階(昭和48年)



農協検診風景(昭和48年)

遠山病院の一角から近くの施設(旧済生会盛岡産院跡)へ移転し独立態勢に入った昭和47年4月に20名となり、昭和50年代初めには50名を突破した。

このような発展の原動力となったのが循環器系検診である。昭和40年代後半、ガンや結核は検診体制がすでに出来上がっていたが、循環器系検診は未開拓の分野であった。当協会はそこに活路を見出し、当協会の命運を賭けてといてよほど意気込んで循環器系検診に着手したという。

しかし、当初は市町村も事業所も「予算がない。余分な検診などとも」と及び腰で、農協も同様で受診対象となる40歳以上の職員が当時は少なかった。循環器系検診の需要が少なかった。7、8名の検診スタッフ「あおぎり1号」を動かして各地の農協を巡回

初年度から多彩な活動

昭和46年2月、当協会は財団法人日本寄生虫予防会ならびに財団法人予防医学事業中央会の岩手支部として認定され、その頃から当協会の業務も実質的にスタートした。そして幸いなことに同年4月、岩手県農協婦人部より重労働に明け暮れる農村婦人の貧血検査の委託を受け、農村巡回検診が始まった。

これと並行して農協共済連が共済加入者へのサービスとして実施してきた巡回無料検診も、それまで担当してきた県立病院にその余裕がなくなり昭和46年度から当協会へ委託されることになった。昭和47年度からは、農協共済連が助成制度を設けて当協会と農協との関係は密接になった。

このほか、『事業年報』第1号(昭和46年度)を見ると、血液型検査、腸内細菌検査、水質検査、梅毒血清反応検査、子宮ガン検診、糖尿病精密検査、特殊健康診断、事後指導及び啓発事業(学校保健担当者会議、循環器疾患に関する講習会、農村保健講習会)、調査研究発表活動など初年度から多彩な活動を展開したことがわかる。

循環器系検診車「あおぎり1号」

県内初の検診車による循環器系検診を行ったのも初年度で、昭和46年11月に前沢町(現・奥州市前沢区)



検診車「あおぎり1号」(昭和47年)



「事業年報第1号」(昭和46年度)

1970
▶79
Chronicle one
胎動期
県民の
健康と福祉を願って

の住民健診において心電図、眼底、総コレステロール、貧血検査などをセットした方法で実施した。

この検診車によるセット式循環器系検診は、受診者の評判もよく十分な手ごたえがあったが、肝心の検診車は栗原常務が東京主張の折に見つけてきた借り物だったため相手の都合ですぐ返すことになり巡回方式による循環器系検診の継続が困難となった。

そこで栗原常務は、当協会独自の検診車を整備する手立てを探り、労働基準局の支援で労働福祉事業団から800万円の融資を受け、昭和47年7月、必要最小限の機器を搭載した循環器系検診車を801万円で整備した。

これが当協会初の循環器系検診車「あおぎり1号」である。名前の由来は、昔、鳳凰というめでたい架空の鳥が留まったといわれる木で、当協会の将来を託した職員の思いがこめられていた(十和田紳一「30年のあゆみ」、『創立30周年記念誌』所収)

その思いにこたえて「あおぎり1号」は、このあと13年間にわたって活躍した。とくにも昭和47年度からスタートした農村巡回検診では目新しさもあって当協会の広告塔となり、県内各地で話題を集めた。

命運をかけた循環器系検診

当協会の事業は、設立して数年のうちに急速な拡大をした。発足当初4名だった当協会職員は、事務所を

すなわち、当時の協会の体制、スタッフでは農協が目指す農民の健康保持という理想を実現することは難しく、県医師会の積極的な協力体制が不可欠であるということになり、当協会は抜本的な組織改革を求められたのである。

このような重大局面で県医師会の佐々木一夫会長、農協四連の岩持静麻会長、協会の遠山美知理事長は、昭和53年春から二者会談、三者会談を何度も行った。佐々木会長は、医師会のやるべき大きな目的の一つは地域医療活動であるという哲学を持っており、岩持会長とは以前から肝胆相照らす盟友であり、岩持会長は「予防に勝る治療なし」という遠山理事長の信念に深い敬意を抱いていた。そのためお互いが腹を割った話し合いができ、トップリーダーの大所高所からの判断に基づいてそれぞれの組織が協議を重ねた結果、以下のことが決定された。

- ① 協会の運営は医師会が中心となる。
- ② そのために寄付行為の一部を改定する。
- ③ その改定に添って従来の理事、評議員の総辞任、再編成をする。
- ④ 農協組織が健康管理センターを建設し、そこに協会が入り、相互の連携協力関係の樹立等々を図る。

医師会組織が運営に参加

寄付行為は公益法人の憲法のようなものでその改定

民の幸福を表現したものである。図案は、盛岡市の松好志郎氏による。

同年10月には第7回北日本心臓血管病予防大会を岩手県民会館で開催。日野原重明先生（当時、聖路加看護大学長）の特別講演「成人病のすべては個人の習慣病」、シンポジウム「検診事後指導の効果的な進め方」等を行い、500人が参加した。

さらに同年11月、県内の第一線で活躍している臨床医を中心として学校保健専門委員会・循環器系検診専門委員会を設置。学術専門的な立場からご指導をいただき、各種健康診断の精度を高めた。

以後、脊柱側弯検診、呼吸器系検診、消化器系検診、ウイルス肝炎対策、眼底検診、乳がん検診などの各種専門委員会、読影医、判定医グループなどが組織された。このように学術的なバックアップが実現したのは、県医師会が経営に参加した大きな成果であるが、その背景には2代目会長に就任した佐々木一夫会長の熱意と行動があった。

佐々木会長は就任するやいなや、各郡市医師会を巡回し、当協会事業への協力を要請して歩いた。続いて当協会役員、郡市医師会役員との懇談会を郡市医師会ごとに開催して歩いた。「夕方6時から2時間程、会議を行い8時頃から懇親会となります。談論風発、夜10時、11時にまで続きます。それから盛岡に向かうわけですが、帰宅は12時、1時でありました」（栗原・前掲書）という。

1970
▶79
Chronicle one
胎動期
県民の
健康と福祉を願って



北日本心臓血管病予防大会で座長を務める田島常任理事
(昭和54年10月)



北日本心臓血管病予防大会 (昭和54年10月)

には県知事の認可が必要である。そのため当協会と県医師会は慎重に協議を重ね、53年7月26日、県医師会の案をもとに寄付行為の一部を改定することが当協会の理事会で決定された。

ついで8月11日、従来の協会理事より9名、県医師会より会長、常任理事合せて11名、計20名の理事が選任された。評議員も大幅に増員され、従来の評議員のほかに郡市医師会長15名が新たに選任された。

新役員は、理事の互選により会長に佐々木一夫県医師会長、常任理事には加藤十郎、田島達郎、小川務、佐藤進、吉田昌男、角田文男、栗原耿の7理事が選任された。

当協会産みの親である遠山美知理事長は、設立以来事業の発展に貢献された功績が顕著であり、その功績をたたえると同時に当協会のために今後も協力していただくため名誉会長に推戴された。

こうして設立8年目に大改革を行った当協会は、県医師会の経営参加によって新たな発展の道を力強く歩み始めたのであった。

清新かつ学術的な活動を展開

生まれ変わった協会は、シンボルマークを公募し、昭和54年9月に制定した。これは、岩手県予防医学協会の頭文字「い」を、大空を羽ばたく鳥のモチーフでデザインしたもので、平和で健康、そして限りない県



シンボルマーク (昭和54年9月制定)

Human 2 人物伝 Portrait

再興の祖



佐々木一夫
Kazuo Sasaki
[1912-1981]
第2代会長

「医は仁術なり」という哲学を持ち、幅広い人望を集めた佐々木一夫は、明治45年生まれ、熱血漢で、昭和51年(1976)に岩手県医師会の会長に就任すると、各役員とともに精力的に郡市医師会を回り、県医師会館の建設、県医師会史の発刊など、会員の理解と協力なくしては成し得ない大きな事業を実現した。

予防医学協会の組織改革もその一つで、医師会関係者の中に協会や農協への不信感が広がっていた当時、「協会の運営を県医師会主導型に変えてほしい」という農協側からの働きかけに応じて医師会をまとめ、寄付行為の変更と組織改革が実現したのは、各種検診事業や地域保健にも深い造詣を持っていた佐々木一夫のリーダーシップの賜物である。

協会を生み、育んだ初代理事長を慈母にたとえるなら、2代会長佐々木一夫は、協会を自立させた厳父である。佐々木会長は、県医師会から多くの役員を協会に派遣したが、協会の自主性を尊重した。

昭和55年7月には協会施設を農村管理センターに移転、また同年10月岩手県健康管理センターが開設され、協会は文字通り「県民の健康と福祉に貢献する」組織にふさわしい機構と体制を整えることができた。

協会の真の出発ともいえるその時、佐々木会長は得意の漢詩で言った。

「万里の長江、あに千里に一曲せざらんや」、万里の長江も時には湾曲し、流れを変える。道、遠ければ、行く道に屈曲もある。協会の将来もまた、必ずしも常に平坦、無事を望みがたい、と。(協会創立10周年記念式典祝辞より)

その後、日本が成熟社会、長寿社会に転換し、予防医学は各種検診事業とともに飛躍的な発展を遂げた。その節目に佐々木会長が発揮した指導力と人徳をこれからも忘れてはならない。



佐々木一夫会長と田島達郎常任理事



遠山美知
Michi Toyama
[1920-2008]
初代理事長

遠山病院前にて(平成12年撮影)

Human 1 人物伝 Portrait

協会の親 生みの親

遠山美知は、大正9年(1920)に樺太(現サハリン)で開業医の娘として生まれ、東京の帝国女子医専で学び、盛岡赤十字病院で実習中に遠山富夫と出会い、戦後、夫ともに盛岡に遠山病院を開設した。

二人は、若い頃から疾病予防の重要性に着目し、昭和30年代前半に検診事業(結核検診)をスタートさせ、昭和40年代に入ると岩手臨床検査センター(主に寄生虫検査)を立ち上げた。その直後に富夫が病に倒れたため、美知は、医療法人遠山病院の第2代理事長となり、法人の経営はもとより医療・保健・福祉・国際交流など幅広い分野で指導的な役割を果たすようになった。

当協会の設立もその一つで、予防医学という考えが医師会関係者からも十分な理解を得られていなかった当時、「予防に勝る治療なし」という強い信念と「県民の健康と福祉に寄与する」という理念を掲げて協会の設立に努め、昭和45年(1970)10月、任意団体として協会を遠山病院内に設立した。

発足当初の協会は、遠山理事長が「私の同志」と呼び全幅の信頼を寄せた栗原耿(当時、検査・業務部長)を中心に若いスタッフが奮闘し、遠山理事長は、その成長を暖かく見守った。まさに慈母のような存在であるが、親としての彼女の偉大さは、協会発足8年後に将来的な発展を見通して、協会の運営を県医師会へ委ねる決断をしたことである。この未来への決断によって協会は抜本的な組織改革を行い、岩手県農協福祉事業団と連携して事業所も設備も一新し、隆々たる前途を切り開くことができた。

そのときの思いを初代理事長の遠山美知は「娘を嫁がせる母親の気持」と言った。幾多の苦難を乗り越えて協会を生み、育て、見事に嫁がせた親としての功績はいつまでも消えない。



昭和47年予防医学協会第1回忘年会

1980
988

新天地で 飛躍に向けた再出発

「予防医学協会 ● 通史2」

健康管理センターの建設

協会の新しい活動拠点となる農村健康管理センターは、54年8月に着工し、55年6月に完成した。その建設構想は、昭和53年の農協福祉事業団の設立にあわせて設置された「施設研究委員会」で検討された。同委員会には県から中島医薬課長、県医師会から田島達郎常任理事、岩手医大の斎藤企画課長、農協共済連の千葉茂夫常務理事、協会の栗原常務理事など13名が委員として参画した。

同施設は、協会の発展計画などを考慮し、当面の事業量対応として協会職員を昭和57年度150人と見込み、検査施設、人間ドックフロアなどの計画もすべて検診機関の施設としての面から検討された。

その結果、建設場所は県内各地への高速道路対応などを考慮して東北自動車道盛岡南インターチェンジに

近い都南村永井地区とし、敷地面積9900㎡（3000坪）、建物は鉄筋コンクリート3階建て、延べ面積5900㎡（1800坪）、建設費11億円が計画された。その資金は福祉事業団への農協、組合員からの基金拠出が完了するまでの間、共済農協連が対応することとして資金運用の中で福祉貸付を充てることにし、農林大臣の特別指定を受けて全国共済連とともに対応した。また、福祉事業団の事業活動、施設建設に対して県から2億円の助成金が交付された。

協会は、農村健康管理センターの完成にあわせて同年7月、清水町のキンダーホーム2階から新天地へ移転した。それまでの協会は、老朽はなほ美しい木造家屋の一角で、200坪あまりの所に約80人の職員がひしめきあっていた。その状態からエレベーターや冷暖房完備の白亜の殿堂に移ったので、耐乏生活を強いられていた職員はまさしく夢のような気持ちだったという。

岩手県民保健センターの開設

岩手県民保健センターは、県医師会館内に開設される県民健康センターと両輪となって県医師会の地域医療活動を担う機関で、協会の技術集積拠点として昭和55年10月1日に開設された。

これにあわせて10月18日、協会創立10周年記念式典



創立10周年・岩手県民保健センター開設記念式典・祝賀会で挨拶する佐々木一夫会長（昭和55年10月18日）



9年間協会施設として使用したキンダーホームとのお別れ会（昭和55年7月）



農村健康管理センター落成式で挨拶する岩手静麻農協四連会長



昭和55年度大忘年会

並びに県民保健センター開設記念式典が開催された。以後、岩手県予防医学協会と岩手県民保健センターがさまざまな場面で併記されることになったが、実は協会と同センターは一つの団体で、財団法人岩手県予防医学協会が法人名、岩手県民保健センターが機能的な名称である。いわば本名と芸名のようなものである。同センターの初代所長は協会常任理事の田島達郎が就任し、協会常任理事の栗原耿が事務局長に就任した。親分肌の田島所長と夢多き熱血漢の栗原事務局長は、協会の発展に心血を注ぎ、職員の意識、技術の向上に努めるとともに事業の飛躍的な拡大を牽引した。



農村健康管理センター完成（昭和55年6月）



人間ドック事業

がんの早期発見や早期治療、生活習慣の改善によって「がん撲滅」を目指そうという活動は、財団法人日本対がん協会が設立された昭和33年頃から始まった。しかし、がんによる死者は年々増加し、1980年代初めの昭和56年に死因第1位となり、日本人の3人に1人はがんで死ぬ時代となった。

言い換えると日本人はがんの恐怖に脅かされており健康生活に大きな影を落としていた。農協福祉事業団が農村健康管理センターの建設に当たって一日人間ドックを巡回多項目検診とあわせて事業の柱に据えたのは、そのような背景からであった。

そのため協会は、農村健康管理センターへ入居する前から人間ドック開設の準備に取り掛かり、県下12万農家を対象として日帰りの一日人間ドック形式を採用することと



生化学自動分析装置



事務室(昭和57年)



多項目血球自動計数装置



検査室(昭和57年)

1980
▶89
Chronicle two
躍進期
新天地で
飛躍に向けた再出発

佐々木会長の逝去

昭和56年7月4日、佐々木会長が心筋梗塞のため自宅で急逝した。佐々木会長は、協会に対する郡市医師会や地域医療機関の不信感を払拭することに最大に力を注いだ。

「岩手県人は岩手で生きている。岩手県人に合った健康管理を考えるべきだ。日本中でもっとも素晴らしい健康県にしよう」というのが持論で、郡市医師会行脚では「予防医学協会をよろしく」と頭を下げた。その姿勢に役員も職員も心を打たれた。

また、全県民を視野に入れた協会のシンボルマーク制定なども佐々木会長のアイデアであり、協会の信頼向上と知名度のアップにリーダーシップを発揮した。「協会再興の祖」といわれるゆえんである。

岩動会長から八木会長へ

佐々木会長の逝去により、同年7月、臨時理事会で理事岩動隆一が会長に選任された。が、岩動会長は一年余で退任して名誉会長となり、昭和57年3月、県医師会長八木義郎が会長に就任した。

八木会長は、協会の設立メンバーの一人で、協会と医師会とのパイ役になってきた。協会の会長に就任してからは、県医師会からの委託により心電図解析センターを開設(昭和59年)、医師国保組合からの胃検診



八木義郎会長



佐々木一夫会長葬儀(昭和56年7月9日)

し、年間6000人、一日平均30人の受診人数で、その日のうちに結果作成、その日のうちに説明、指導という基本構想を固めた。それに対応して職員を40人増強すると同時に、胃部・胸部X線装置や生化学分析装置など1億8千万円の機器整備を行った。

そして9月9日農協四連の岩持会長、小関副会長をはじめ役員の方々が受診者となり一日人間ドックのフルコースの試運転を行った。9月18日には農協福祉事業団の送迎バスが湯本農協の組合員27人を乗せてセンター玄関に到着し、一日人間ドックが本格的にスタートした。

以来、朝にバスを迎え夕方に見送るということが日課となったが、55年度は半年間で3500人、56年度は一年間で4500人の受診者にとどまり、当初の目標人数を大きく下回り、協会は2期続けて赤字決算となった。

この予想外の反応に事業団、共済連、各農協、協会ともに戸惑い、57年から共済連が中心となって体制を立て直しに取り組んだ。また事業団や協会でも一日人間ドックは集団検診とは考え方、内容、利用方法などが根本的に違うことを市町村職員や保健婦さんに理解してもらったため、各市町村単位で会議や検討会を開催した。

このような努力の結果、58年度は6200人、60年度は7500人となり、63年度には8000人を突破し、当初の目標を達成することができたのであった。

機器の貸与(昭和62年)、県南支所の開設等に尽力した。

医師国保組合では組合員とその家族、従業員の巡回成人病検診を協会に委託して実施していたが、その際協会は、胃検診については対がん協会に協力をお願いしており、種々の面で対がん協会に迷惑をかけていた。そのため医師国保の理事でもあった八木会長は、健康の自己管理意識の高揚を叫ぶ医師自らが範を示すべきだという考えから、昭和62年に医師国保の機器として胃検診機器を導入することを提案、実現した。これによって協会は、機器の余力を持って事業所検診に際して対がん協会に迷惑をかけることなく胃検診を行うことができるようになった。

また、県南支所については「私にとってまことに印象深いことです。これは協会の将来への大きな布石でありましょう」(閑中雑感)、「創立20周年記念誌」所収)と感想を述べている。

八木会長は、協会の生い立ちに精通し、設立当初からの職員とも顔なじみであり、職員が伸び伸びと仕事に専念できる職場風土を醸成した。

広報誌「健康いわて」創刊

協会の事業内容を大別すると、広く県民を対象とする諸検査健診事業、作業環境測定等の環境調査事業、それらの結果を踏まえた健康支援活動の三事業となり、対象別には学校保健、地域保健、職域保健に分けるこ

とができる。

それらの事業計画や実績を公開し、協会に対する関係諸団体の理解を深めるとともに県民一般の意識高揚に役立てることはかねての懸案であったが、昭和57年度から広報誌発行の予算が実現し、同年4月に創刊号（B5版10頁）が発行された。

発行目的は、協会の活動紹介と諸保健情報の提供、もっとわかりやすく言えば「岩手県予防医学協会の名前を一人でも多くの人に知ってもらい、そして、それを忘れないで覚えてもらうこと」（田島達郎「ボクの名前は・・・」、創刊100号所収）である。

広報誌発行の発案者は田島所長で、名前は職員から公募して「健康いわて」と決めた。年6回偶数月に2千部発行、県内全市町村、教育委員会、小・中・高等学校、農協などへ送付。内容は協会中心の記事であるが、ゆくゆくは各界の学識経験者や保健担当の方々からの寄稿をお願いして社会性、公共性の高い広報誌として充実させたいと考えていた。

創刊号の表紙を飾った写真は協会施設と健診車「あおぎり号」であったが、表紙の写真は主に各種イベントの生き生きとしたスナップ写真が使われた。文字だけでなく写真をたくさん使って見やすくしたのも特徴の一つで、昭和59年7月発行の第15号から表紙写真がカラー化された。

歴代の編集担当者は、初代が田部国彦と中山茂一、2代目が舟越正幸、3代目が村上久美子と小路方由士、が参加した。大会テーマは「生存秩序の確立を目指して」。特別講演は「保健活動のはざまを考えると題して、小泉明東京大学医学部教授、藤野志明中央大学経済学部教授、須川豊予防医学事業中央会理事長がそれぞれの専門的視点から行った。もう一つの講演はNHK医療番組チーフディレクター行天良雄氏の「番組に見る日本人の健康観」、シンポジウム「健康教育活動を考える」等、実際的で中身の濃い大会であった。

また、初日の式典において協会顧問の遠山美知が予防医学事業中央会感謝状を、常務理事の栗原耿が予防医学事業中央会賞を受賞した、協会にとって記念すべき大会となった。

コンピュータ化への対応

年々ふえ続けている健康診断や諸検査のデータを、より速く、正確に受診者にかえすための方策として昭和59年から健康診断の一部を心臓検診、循環器系検診、巡回多項目検診、婦人健康検査及び定期一般健康診断においてパッチシステムで統計処理を行ってきた。

その後、各種情報処理のコンピュータ化に対応するため昭和60年5月、協会内にコンピュータ準備室並びにコンピュータ検討委員会を設置。検討委員を4グループに分け、すでにコンピュータを導入している全国の9検診機関の運用状況を視察すると同時に、日立グループ、岩手電子計算センター（現ICS）との間で検討を重ね、

1980
▶89
Chronicle two
躍進期
新天地で
飛躍に向けた再出発



「健康いわて」創刊号
(昭和57年4月)



HITAC-70/45L



心電図自動電話電送システム

4代目が千葉時胤で創刊100号（平成3年8月発行）を迎えた。

予防医学事業推進全国大会

この全国大会は、予防医学事業中央会傘下の各県支部が一堂に会して年一回各県持ち回りで開催される大規模な大会である。昭和58年度は岩手県が会場となり、岩手県、県教育委員会、盛岡市、予防医学事業中央会、日本寄生虫予防会、岩手県予防医学協会が主催者となった。

日時は昭和58年8月25日（木）、26日（金）の2日間、会場は岩手県民会館で、県内外から1700余名



予防医学事業推進全国大会（昭和58年8月25・26日）



予防医学事業中央会賞受賞の
栗原耿常務理事



同大会で感謝状を受ける
遠山美知協会顧問

それぞれが分担してプログラムの作成にあたった。

昭和61年4月1日から従来方式をコンピュータ方式に切りかえ、検診から報告までの迅速化、効率化、データバンク機能、検査の精度管理及び受診者サービス向上を目的として、本格的なコンピュータ化を実現した。

これによって循環器系検診、多項目検診、成人病検診、一日人間ドックのデータをコンピュータ化したが、将来はこれらの検診だけでなく当センターで行っている様々な検診のデータ処理も開発し全面的なコンピュータ化を実施してゆくこととなった。

このとき導入したコンピュータは「HITAC-70/45L」（日立製）で、記憶容量は主記憶装置で600万文字、補助記憶装置で10億4千万文字規模のものである。このコンピュータには8台のビジュアルディスプレイ・ターミナル（VDI）が接続し、画面にうつし出された結果表にそれぞれの情報やデータを入力する。検査室の血液自動分析機のうち生化学検査については一時フロッピーディスクにデータを移し、それからコンピュータに記録される。その他の自動分析機とはオンラインになっており、直接記録される。

また個人の基礎的な情報はマークシートから記録される。こうして取り入れたデータは、漢字プリンターによって結果通知書並びに成績一覧表に漢字で印字される仕組みになっている。従来のパッチシステムでの統計処理ではカタカナ印字であったが、漢字で印字することが可能になった。

その後のコンピュータの驚異的な技術革新やインターネットの普及を考えるとこの頃のコンピュータは高い、大きい、処理速度が遅いということになるが、当時は最新鋭のコンピュータシステムで市町村や農協の関係者から注目を集めた。

健康教育研究会

効果的な健康教育を目指して企画された健康教育研究会は、昭和60年にスタートした。この研究会は、NHK放送文化基金からの助成を得た予防医学事業中央会が「健康ビデオ等の有効利用を地域で研究しあうことを通じて健康教育活動全般の充実活性化を期する」という目的のもとに全国9県支部を研究会開催県として選定したものである。

協会では同年7月26日、全国のトップを切って第1回健康教育研究会を県医師会館健康教育センターにおいて開催した。県、保健所、市町村等から保健婦を中心とした関係者60名余が参加し、午前10時より午後3時まで熱心な研究討議を行った。

当日のメニューは、①実技と理論紹介、②講演、③意見交換の3部からなり、協会の松尾洋一健康教育係長が「健康ビデオの手法実技」、広島県の衛生教育センターから招いた鷹田直紀氏が「衛生教育媒体の有効性」について講演した。

わざわざ広島県から講師を招いたのは、協会内にビデ



県南支所開所式(昭和61年3月29日)

であった。

場所は、工業団地の多い県南地区の水沢市花園町(現・奥州市)で、昭和61年3月29日に開所式を開催し、職員7名、胸部X線検診車1台で業務を開始した。

これによって当協会の事業所健診は順調に実績を伸ばし、平成元年度には県下1400事業所、5万4977人へ飛躍的に増大した。

加藤十郎会長

昭和63年4月、八木義郎会長が退任し、加藤十郎(大正7年盛岡生まれ)が会長に就任した。高齢化社会の進行につ



1980
▶ 89
Chronicle two
躍進期
新天地で
飛躍に向けた再出発



第1回健康教育研究会(昭和60年7月26日)

才活用の技術を持つ職員がいなかったためOHPの視覚教育で豊富な経験を持つ松尾係長を先進団体である広島県地区衛生組織連合会に派遣して2日間の特訓を受けたからであった。

その後、昭和61年1月、協会内に健康教育課を設置、十和田伸一課長のもとに保健婦3名を含む4名のスタッフが配属された。

また、健康教育研究会は毎年一回定期的に開催されるようになり、その時々が必要とされるさまざまな情報を提供し、健康教育の進め方についてともに考えてゆくことになった。

県南支所開設

岩手県における事業所従業員を対象とした定期健康診断は、協会のほか保健所や民間の医療機関、あるいは県外の検診機関など多くの団体により実施されている。

協会事業としてこの健康診断への対応は、協会設立の翌年(昭和46年)から始まった。特殊健康診断、循環器系検診がその端緒であるが、第1号の胸部X線検診車が整備された昭和52年度から胸部X線検査を組み合わせた一般健康診断がスタートした。開始初年度の実績は81事業所、6千人余であった。

この事業所検診を充実させるための拠点として開設されたのが県南支所である。きめ細かなサービスを行うことで他の健診機関との競争力をつけることが大きな動機

れて長寿社会対策が国及び県ともに重要政策となる中、健康管理活動のニーズが増大すると同時に多様化してきた。当協会の事業も順調に発展を続け、県内の代表的な検診機関としてその任務と活動がますます重要性を増してきた。

加藤会長は、このような時代背景を念頭に役職員一丸となって創立の原点を見失うことなく常に資質向上に努めることを基本方針として、創立20周年記念事業(式典、祝賀会、記念講演会、記念誌発刊等)、県南センターの開設などの大きな事業の遂行に尽力した。

盛岡さんさ踊りに初参加

盛岡の夏を彩るさんさ踊りは、東北の代表的な夏祭りの一つであり、12回目を迎える平成元年8月、当協会は盛岡さんさ踊りに初参加した。2ヶ月近くも前から太鼓や踊りの練習を重ね、田島専務以下100人を超す職員が揃いのゆかたに身を包んで、サッコラチヨイヤッセと熱気あふれる踊りを披露した。

あまり乗り気でなかった職員をその気にさせたのは、祭り好きの田島専務の熱意で、疲労困憊の中での達成感と一体感、田島専務はこの瞬間の素晴らしさを職員に知ってほしかったのかもしれないという(川村和子「忘れぬ人々」)

以来、盛岡さんさ踊りへの参加は当協会の夏の風物詩となった。



平成元年8月さんさ踊りにて

「予想外のスタート結果」

当協会の一日人間ドックは、県下の農協組合員ならびに農協共済契約者を主たる対象として、(財)岩手県農協福祉事業団が実施主体となり、昭和55年にスタートした。

おりしも協会は創立10周年を迎え、施設を盛岡市西南の永井地区に建設された農村健康管理センターへ移転した直後であった。一日人間ドックのスタートに関係機関も協会も大きな期待を寄せ、年間受診者6000人、その日のうちに結果作成、説明、指導という基本構想を掲げた。これにあわせて、協会の医師人に加えて外部から内科医2名、婦人科医1名の応援体制と各種の検査機器を整備するとともに、新たに人間ドック担当職員30人を採用した。

こうして準備を進め、同年9月9日に農協四連(当時)の岩持会長、小関副会長をはじめ専務、参事の方々が実験台となって一日人間ドックの試運転を行い、9月18日、最初の受診者となる湯本農協の組合員27名を迎えた。

ところが初年度の受診者数は3219人とどまらず、翌年度も4449人と低迷した。この予想外の結果に関係者はショックを受けた。

「受診者確保のために奔走」

一日人間ドックのために大掛かりな投資と人員増をはかった協会は、55年度、56年度2期連続で大幅な赤字決算となり、苦境に立たされた。

栗原常務は「誠につつましい会計規模でありましたが、赤字決算というのは設立以来この時までなかったのです」(栗原耿「協会1/5世紀」より)と苦しい胸のうちを語り、「実は、この一日人間ドックは、農協の事業として農協組合員に普及してゆくという基本方針でスタートしたため、市町村への協力要請や説明はあまりしていなかったのです」と、市町村との連携、とくに保健婦の協力なしではどうにもならないと反省した。

共済連も、事業計画にそって県下83農協(当時)に割り当てれば受診者が確保できるという甘い予測を捨て、態勢を立て直しに取り組んだ。

市町村と農協が一体となった事業として推進する方策を模索した。各市町村単位で検討会や会議を開

一日人間ドックのはじまり

催し、人間ドックを市町村の検診事業の一つに組み入れてもらい、農協の受診料補助に乗せて市町村からも補助を出してもらうことや、市町村長と農協組合長の連名で受診者を募集すること、人間ドックのデータを保健婦の保健指導に活用できるようにすること等々、様々なアイデアを検討し、実施した。こうして地道な努力を積み重ねることで昭和57年度の受診者数は6645人となり目標を達成することができた。

その後は市町村との連携が順調に進み、年ごとに受診者が増加した。開始13年目の平成4年(1992)に1万人を突破し、平成12年にはスタート時の約5倍にあたる1万6618人が受診した。

「検査項目の増加と有所見率の増加」

一日人間ドックの検査項目も時代とともに変化した。体脂肪、血清鉄、LDLコレステロール、HCV、前立腺特異抗原、マンモグラフィ、腹部超音波検査、踵骨超音波検査、心臓超音波検査、歯周病など、有効性のある検査項目を次々に加え、現在は70項目を超えている。

これにあわせて有所見率も増加し、平成12年度の有所見率は全体で98.9%にのぼり、総合判定における要指導が50%、要医療が40%に達した。有所見率の高いものは心電図、肝疾患、糖尿病、高血圧、貧血、

「安心安全な人間ドックを目指して」

平成16年、当協会は人間ドックセンターを開設し、一日人間ドックの他に脳ドック、心臓ドック、肺ドック、レディースドックなどの専門ドックを加え、これらのドックを自由に組み合わせ受診できることが可能になった。

また近年は、より精度の高い検査をより早く提供することや、多様な人間ドックのメニューの中から受診者一人ひとりの要望に合わせて受診することなどが求められている。

さらに、日本人間ドック学会による人間ドック健診施設機能評価制度、人間ドック専門スタッフの人材養成、人間ドック専門医制度なども導入され、安心安全な受診環境の整備が必要不可欠になった。

当協会は、このような変化に率先して取り組んでいるが、一日人間ドックの受診者数の伸び率はほぼ横ばいの状態が続いている。スタート直後に赤字に転落という困難な状況を打破して一日人間ドック事業を軌道に乗せた先人たちの取り組みを思い起こし、持続的な発展を続けてゆきたいものである。

